

令和 3年 1月 30日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 平成 30 年度

受付番号 201860078

氏 名

中尾 沙希子

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地： パリ大学 (国名：フランス)
2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。
西アフリカにおける「アフリカ」系移民とアイデンティティ形成
3. 派遣期間： 平成 30 年 10 月 1 日 ~ 令和 2 年 12 月 31 日
4. 受入機関名及び部局名
受入機関名： パリ大学
部局名： アフリカ・アメリカ・アジア世界社会科学研究所
5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)**
(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)
(注)「6. 研究発表」以降については様式 10-別紙 1~4 に記入の上、併せて提出すること。

5. 所期の目的の遂行状況及び成果

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

本研究は、「アフリカ」概念の定義が、脱植民地期の西アフリカにおけるアイデンティティ、とりわけナショナル・アイデンティティの根幹を成していることを明らかにした研究員のこれまでの研究の延長として、20世紀の西アフリカにおいて、帰属意識がどのように形成されていくのか、その生成過程を解明することを主眼とし、当該地域の「移民」の位置づけを通して、「アフリカ」概念と、その輪郭を規定する部外者ないし他者の定義の変遷をたどるものである。

初年度は、研究員のこれまでの研究の成果を整理し、そこから本研究につながりながら課題を導き出す作業を行ったのち、本研究課題をa)大陸内の移民、b)環大西洋移民、の二つの項目にわけて文献調査、史料調査を行った。

2年目は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、研究機関が長期間にわたって閉鎖されたほか、史料収集のための調査地への渡航の延期を余儀なくされたため、研究課題の理論的側面を中心に考察を進めた。

これらの作業と並行して国際的な研究ネットワークに参加し、本研究課題とも関連づけながら共同研究の企画を進めた。

以下では、1. 事例研究、2. 理論研究、3. 共同研究の3点について、その詳細を報告する。

1. 事例研究

ブルキナ・ファソ（2018年8～9月）、セネガル（2018年11月）、ガーナ（2018年12月）でインタビュー調査を行ったのち、それを補填するかたちで文献調査を行った。本研究の対象となる「アフリカ」概念の輪郭を規定する「部外者」「他者」としての「移民」を、a)独立国家成立と共に確立した国境をまたいで政治・経済・文化活動を行うための移動と、b)一般に「アフリカ系」として分類される「ディアスポラ」のうち、環大西洋奴隷貿易によってカリブ海地域および南北アメリカに送られたひとびとの「帰還」との二種類に分類し分析を進めた。いずれの場合も移動の契機となったパン・アフリカ主義的連帯の思想が、実際の移動後のコミュニティ間の接触に際してどのように変化していったかに着目した。

a) 大陸内の移民

独立国家の成立にともない、出身地とは異なる地域で活動を展開することになった政党として、1957年に成立したアフリカ独立党（PAI）と民族解放運動（MLN）を挙げることができる。フランス植民地帝国の制度改変に対して、いち早い独立を政治目標として結束した両政党は、1958年、フランス第四共和政から第五共和政への移行と、植民地制度の改変をめぐる行われた憲法改正の国民投票に際して、反対票を投じるよう呼びかけ運動を展開していた。しかし、賛成票多数で改正憲法が成立し、賛成派が各植民地で政権につき、その後独立を達成すると、反対運動を行っていた勢力は政治活動を禁止されるなど、周縁化されることとなった。よって、メンバーたちの多くは、域内の隣国への亡命を余儀なくされるなど、水面下での活動を続けてきた。

初年度は民族解放運動に特に焦点をあて調査・分析を行った。研究員が2014年にブルキナ・ファソで運動の創設メンバーに対して行ったインタビュー調査と、2018年にブルキナ・ファソおよびセネガルで追加で行った元黨員へのインタビュー調査、政党員の多くが参加していた学生団体（在仏ブラック・アフリカ学生連盟、アフリカ・マダガスカル・アンティル諸島カトリック学生協会）の機関誌に掲載された論稿の分析をもとに、民族解放運動の集団的伝記記録の試みを論文としてまとめた。当該論文は“**Fighting for National Liberation in Africa: Pan-African Itineraries and National Settlements**”というタイトルで政党の掲げるパン・アフリカ主義思想と、各黨員の置かれた環境の制約とが拮抗する様子を描き、独立後のアフリカの政権を、周縁

に置かれたアクターの伝記的記述を通して分析することを試みた著作Anais Angelo (dir.), *Biographical Narratives as Alternative Histories of Power in Africa*の一章として、Routledge社から年内に刊行される予定である。

アフリカ独立党に関しては、2年度目にインタビュー調査を行う予定で準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で調査を延期せざるを得ず、分析に必要な史料を派遣期間内に収集することができなかった。

b) 環大西洋移民

パン・アフリカ主義は、世界各地の「アフリカ系」のひとびとの連帯を唱えた思想・政治運動であったが、その連帯意識が植民地解放に大きく貢献した一方で、運動の内部では、常に複数の勢力が緊張関係にあったことは、これまであまり着目されてこなかった。とりわけ、南北アメリカおよびカリブ海地域のアフリカ系ディアスポラと、アフリカ大陸のひとびととの間には「アフリカ」観に齟齬があることは、研究員のこれまでの研究でも明らかになっている。とりわけガーナ独立時のンクルマ政権は、パン・アフリカ主義政策の一環として多くのアフリカ系ディアスポラを招聘し、政権運営を行ったが、地元の新聞記事などからは、これらの人物が必ずしも「身内」としては受け入れられていなかったことがわかる。2018年12月のガーナ滞在では、ンクルマ政権のパン・アフリカ主義政策に関わった人物とその家族へのインタビュー調査を行った。

これらの成果を踏まえ、2019年6月にスコットランドのエジンバラ大学で開催された欧州アフリカ学会において、受け入れ研究員のオディール・ゲルグ教授と共に、**Pan-Africanism between Unity and Divergence (1950-1960s)**と題したパネル・ディスカッションを企画した。公募の結果、同ディスカッションには、アメリカ合衆国デトロイト・マーシー大学のガイル・プレスビ教授、カルフォルニア大学デイヴィス校のラッセル・ジャン＝バティスト教授と、フランス社会科学高等研究院のシャロット・グラブリ博士が登壇し、ゲルグ教授の議長のもと、研究員はディスカッサントとして、議論の進行を行った。

2. 理論研究

これらの事例研究をもとに、本研究課題を遂行するのに重要と思われる理論的基盤について考察を進めた。その結果、従来のパン・アフリカ主義研究では見落とされていた点を補完するために人物研究の手法を用いること、パン・アフリカ主義思想と「人種」概念の連続性に着目することの二点の重要性が明らかになった。

a) 人物研究

パン・アフリカ主義運動は、それ自体がアフリカの歴史叙述の方法に意識的な運動であったため、とりわけオーラル・ヒストリーを史料の一部として用いるにあたっては「抵抗の語り」のダイナミクスに留意する必要がある。本研究では、これまでパン・アフリカ主義の歴史において主な分析対象となってきた独立国家政権の中心人物だけでなく、周縁に位置づけられたアクターたちの動きにも光をあてることの重要性を確認した。

また、ニューヨーク大学のフレデリック・クーパー教授との意見交換を通して、本研究課題の中心的テーマである「アイデンティティ」形成のプロセスにおいて、「アイデンティティ」を規定する政策側のダイナミクスと「アイデンティティ」を体現するひとびとの戦略的実践とをわけて捉える必要性が確認された。この両者の相互作用は、パン・アフリカ主義の文脈においては、独立国家政権と政権によって周縁化されたアフリカ独立党、民族解放運動の両政党との摩擦として現れることから、本研究では後者の軌跡を通して、その全体像を描くことを試みた。

b) 「人種」概念の受容と転用

独立国家の枠組みと並行して本研究課題の中心的な分析対象となったのは「アフリカ」概念の形成過程である。とりわけ環大西洋的連関に着目する際、「アフリカ」概念の形成過程における「黒人性」をめぐる表象の影響を明らかにすることが重要な課題となった。この点に関して分析を進めていった結果、「アフリカ」性と「黒人」性はしばしば連続したものとして捉えられていたことから、パン・アフリカ主義思想における「アフリカ」の定義が「黒人」性の根本にある「人種」概念を基盤としている可能性について検討する必要性が確認された。

この点に関して、アフリカ独立党が標語としていたウォロフ語で連帯や統一を意味する *Boksareew* の解釈としてパン・アフリカ主義とパン・ネグリスム、すなわち「黒人」の連帯を掲げていたことから、同政党における「人種」概念の解釈についての分析を行うことが今後の課題として指摘された。

一方、パン・アフリカ主義と「人種」概念の関連性について考えるにあたっては、第一回パン・アフリカ会議を主催したパン・アフリカ主義の先駆者としてしられ、アメリカ合衆国においては黒人解放運動の中心的な役割を担ったアフリカ系アメリカ人の知識人、W. E. B. Du Bois についての研究から手がかりを得ることができる。近年、Du Bois の思想について新たな研究が進んでいるとともに、派遣先のフランスでは「人種」概念の歴史についての研究も新たな展開をみせている。よって、研究員はこれらの議論に注意を払いながら、ウェブ上で閲覧の可能な Du Bois 関連の一次史料の分析を行ったところ、新たに、「人種」概念を軸としてパン・アフリカ主義運動とパン・アジア主義運動との連動性が明らかになった。これまで「人種」概念の作用は帝国史や国家史の枠組みで論じられることが多かったため、パン・アフリカ主義とパン・アジア主義の連関という、広範な視座からの分析は今後、「人種」概念の歴史研究を大きく刷新する可能性を有していると思われることから、本研究課題の先の課題として、新たに組み込んでいきたいと考えている。

3. 共同研究

植民地や帝国の国境を越えた地域的移動や、さらに広範な環大西洋の交流、社会主義・マルクス主義といった世界規模での思想的潮流に着目し、それらが拮抗するさまを多角的に捉えることを試みる本研究課題においては、視点やフォーカスの選択が重要な意味を持つことから、研究員はこれらのアプローチについての議論を行う研究ネットワークに参加し共同研究を進めてきた。

a) フランス国立社会科学高等研究院・日仏財団主催セミナー

フランス国立社会科学高等研究院のアフリカ研究およびイスラーム研究の研究者と共同で、セミナーおよびワークショップを月 1 回開催し、地域研究の限界と新たな可能性について、アフリカ・アジアの視点から検討を重ねた。

b) パリ大学・京都大学共同研究プログラム

受入研究機関パリ大学のアフリカ・アメリカ・アジア世界社会科学研究所と京都大学東南アジア研究研究所、アジア・アフリカ地域研究研究科の共同研究プログラムの企画に参加した。同プログラムは、東南アジアとアフリカ間の人や思想の交流・循環に伴う規律の変遷に着目し、共同セミナーやワークショップを開催するプログラムで、現在日本学術振興会とフランス外務省・高等教育・研究省共催の日仏交流促進事業（SAKURA プログラム）に応募中である。